

第 35 回日本女性医学会学術集会

Web 参加 2020.11.21-12.11

卵子提供—自己卵による妊娠を断念した不妊治療当事者の選択—

○小宮慎之介¹ 浅井淑子¹ 小野淑子² 村田紘美² 森下みどり¹ 貫井李沙¹ 姫野隆雄¹ 井上朋子¹ 岡田英孝² 森本義晴¹

1 HORAC グランフロント大阪クリニック

2 関西医科大学大学院 産婦人科学講座

【背景】過去 10 年で不妊治療周期数は増加しているが、採卵あたりの生児獲得率は減少している。自己卵での妊娠を断念した場合、一般に夫婦二人の生活、あるいは里親制度や特別養子縁組制度の活用を選択するが、第三の選択として、外国で提供卵子による不妊治療を継続する例が存在する。提供卵子による不妊治療を選択したケースの実情を明らかにするため、本研究を行った。【方法】2015 年 4 月から 2019 年 1 月の初診患者 2189 症例中、最終的に提供卵子を用いた不妊治療を選択するに至った 23 症例 (1.1%) および、治療時期、年齢、夫年齢、BMI、喫煙歴、AMH 値を因子とした傾向スコアマッチングにより決定されたコントロール群 105 例における、妊娠までの経過を後方視的に集積した。【結果】卵子提供群は妊娠時年齢が高く (47.2 vs. 45.1、 $p < 0.001$)、妊娠率も高かった (82.6% vs 14.3%、 $p < 0.001$)。結婚から妊娠までの期間には有意差がなく ($p = 0.10$)、不妊治療開始から妊娠までの期間は卵子提供群で長期化 ($p = 0.003$) した。【考察】今回の調査を通じて、卵子提供を選択する当事者の現状を、一部示すことができた。卵子提供は高い妊娠率が供されるものの、生物/医学的・倫理的・経済的・社会的なハードルが高い治療行為であり、長期の不妊治療を経た後の選択となる。全国的な症例集積・解析を進め、卵子提供を選択せざるを得なかった不妊症患者および周産期医療の負担を減らせるような提言につなげていく必要がある。